

IGC 巡検(1992年)

諏訪 兼位¹⁾

はじめに

巡検 A・B・C すべてがスムーズに行われ、怪我人もせず、無事に終わったことはなによりも嬉しい。IGC 巡検のすべての関係者に感謝したい。

IGC 巡検は科学プログラムと同様、IGC には不可欠の重要な事業である。今回の IGC において、巡検に関する組織的な取り組みは、巡検実施の7年前から始まった。すなわち、IGC 準備委員会(飯山敏道委員長)の時代(1985-88年)の当初から巡検小委員会は活動を開始した。つづく IGC 組織委員会(佐藤 正委員長)の時代(1989-93年)に、その活動を発展させ、巡検を成功にみちびいた。

IGC 準備委員会時代の巡検小委員会

IGC 準備委員会の第1回会合は1985年5月20日に学術会議で開かれた。巡検については、準備・計画立案を私が担当することとなった。そして兼平慶一郎・水谷伸治郎両氏と相談しながら進めることなどが話し合われた。しかし、残念なことに兼平氏はまもなく他界された。

これをうけて、巡検小委員会の第1回会合を1985年10月13日に名古屋大学で開いた。北は北大の加藤 誠氏から西は九大の柳 哮氏まで、全国から10名ぐらいの人が集まった。この会合で、巡検小委員会の構成は、地域別ワーキンググループとテーマ別ワーキンググループの2本立として、このふたつが縦糸・横糸の関係で有機的に連動すべきことが話し合われた。そして、地域別・テーマ別に討議された巡検候補地を、各委員が名大に連絡することとなった。「巡検小委員会ニュース」第1号は1985年10月14日に発行された。以後、このニュー

スには、巡検小委員会の活動、とくに巡検候補地のリストがタイムリーに発表された。実務委員の足立守氏と鈴木和博氏の献身的努力は、以後7年間続くこととなる。このニュースは第15号を1989年10月5日に発行して、その役割を終えた。

IGC 組織委員会時代の巡検小委員会

IGC 準備委員会の第9回で最後の会合は1988年12月15日に神田の学士会館で開かれた。IGC 組織委員会への移行を確認し、役割を果たして準備委員会は解散した。

IGC 組織委員会の第1回会合は1989年6月16日に神田の学士会館で開かれた。この会合で、巡検小委員会の構成は準備委員会時代のものを継承することが確認された。これをうけて、巡検小委員会の第1回会合が1989年9月7・8の両日、名古屋大学で開かれた。

巡検候補地・巡検リーダーの選定、巡検リーダーによる候補地の下検分・巡検費用の算出・サーキュラーの原稿作成・巡検ガイドブックの原稿作成・校正・巡検参加者への連絡・巡検地での案内と世話・後始末など、実に多様な面倒な仕事がつづくこととなる。200名以上の日本の地質家がリーダーおよびサブリーダーに選ばれ、75名のアシスタントが協力した。さらに、韓国とフィリピンの地質家も巡検リーダーおよびサブリーダーとして IGC 巡検(1992年)に協力した。

また、かねて申請中の総合研究 A「日本列島 Geotraverse 基礎調査の総合的研究」(代表者: 諏訪)が1989・90・91年度の3年間採択され、総額1650万円が文部省から支給された。この総合研究 A の研究活動・成果が、実質的に巡検小委員会の活動を

1) 日本福祉大学経済学部, 元名古屋大学理学部; 巡検委員長:
〒465 名古屋市名東区梅森坂1-1020

キーワード: IGC, 巡検

第1表 IGC 巡検小委員会の構成と役割

委員長	諏訪兼位(日福大・名大)	
副委員長	水谷伸治郎(名大)	中部地方
委員・幹事	足立 守(名大)	堆積
委員・幹事	小沢智生(名大)	古生物
委員・幹事	加藤碩一(地調)	構造
委員・幹事	鈴木和博(名大)	火成岩
委員	相原安津夫(九大)	石炭
委員	井本伸広(京教大)	近畿地方
委員	宇井忠英(神大)	火山
委員	氏家 宏(琉大)	琉球地方
委員	沖村雄二(広大)	中国地方
委員	片平忠実(石油資源)	石油
委員	加藤 誠(北大)	北海道地方
委員	小島圭二(東大)	地質工学・自然災害
委員	小松正幸(愛媛大)	変成帯
委員	斎藤常正(東北大)	東北地方
委員	斎藤靖二(科博)	関東地方・島弧
委員	島崎英彦(東大)	鉱床
委員	鈴木堯士(高知大)	四国地方
委員	初倉克幹(基礎地盤)	地下水
委員	柳 哮(九大)	九州地方

支えてくれることとなった。

巡検小委員会の構成と役割は第1表に示すとおりである。

巡検地の決定

巡検小委員会では、それまでに集まった100コース以上の巡検候補地について、1989年11月から1990年2月にかけて、絞り込みの選定作業をつづけ、ファースト・サーキュラーに80コースを提示した(第2表)。内容的には、環境地質8, エネルギー資源2, 地球年代学1, 地球化学6, 火成岩12, 変成岩16, 鉱産資源8, 古生物7, 第四紀14, 堆積14, 層位13, 構造24, 列島トラバース12, 火山7である。

この80コースについて、世界中からアンケートを求めた。沢山のアンケートが集まり、それをもとに1990年10月に検討を加え、セカンド・サーキュラーには67コースを提示した(第2表)。1991年6月、67コースの巡検リーダー各位に、巡検ガイドブック作成のフォーマットを送り、かくして原稿執筆がはじめられた。

一方、提示した67コースについて、正式な巡検参加申込みが窓口のJTBを通じて、次第に集まってきた。参加申込みの少ないコースについては、直

第2表 IGC 巡検(1992年)

	A	B	C	計
First Circular	25	18	37	80
Second Circular	17	25	25	67
Third Circular	15	20	18	53
実施巡検数	15	20	18	53
巡検参加者	206人	540人	300人	1046人

接、巡検リーダーの意見を聴き、少人数でも行うという巡検は残し、サード・サーキュラーには53コースを提示した(第2表)。

なお、B巡検については、井本伸広氏が精力的に調整の任にあたられた。

巡検ガイドブックの完成

セカンド・サーキュラーに提示した67コースについて、巡検ガイドブックの執筆がつづけられた。巡検ガイドブックの執筆を担当した巡検リーダー各位は、最新の研究成果や情報をコンパクトな形で提示すべく、努力を惜しまれなかった。

査読は、巡検小委員会のメンバーをはじめ、多くの方々々に依頼した。

結局、A巡検16, B巡検22, C巡検22(うち1つは韓国で発行)計60コースについて、巡検ガイドブックが発行された。

さらに、韓国発行分をのぞく59コースについては、内容別に以下のように、6巻に分類・合本して発行された(第3表)。

中・古生代(Vol. 1, 名大), 新生代(Vol. 2, 地調), 環境地質(Vol. 3, 地調), 火山(Vol. 4, 地調), 変成帯(Vol. 5, 地調), 鉱床(Vol. 6, 資源地質学会)。

巡検ガイドブックの編集について、地質調査所の加藤碩一氏・野呂春文氏・浦辺徹郎氏・青木正博氏および名古屋大学の足立 守氏・鈴木和博氏の皆さんは、労力を惜しまず、立派なガイドブックの完成に努力された。

また、巡検ガイドブックの出版には、地質調査所(小川克郎所長・佐藤壮郎次長), 名古屋大学学術振興基金, 資源地質学会(石原舜三会長)の援助に負うところが大きい。

第3表 IGC 巡検ガイドブック(合本分)

- Vol. 1. Paleozoic and Mesozoic Terranes: Basement of the Japanese Island Arcs (edits. M.Adachi and K.Suzuki, including guidebooks of A01, A05, A22, B05, B06, B13, B14, B21, C02, C10, C19, C29 and C30), 354pp.
- Vol. 2. Island Arcs: Cenozoic Stratigraphy and Tectonics of Japan (edits. H.Kato and H.Noro, including guidebooks of A10, A14, A15, B07, B08, B09, B22, B23 and C05), 189pp.
- Vol. 3. Environmental Geology and the Late Quaternary of Japan (edits. H. Kato and H.Noro, including guidebooks of A12, A13, B01, B02, B10, B18, C11, C16 and C35), 177pp.
- Vol. 4. Volcanoes and Geothermal Fields of Japan (edits. H.Kato and H.Noro, including guidebooks of A03, A06, A23, B11, B24, B25, C12, C13, C15 and C32), 276pp.
- Vol. 5. Metamorphic Belts and Related Plutonism in the Japanese Islands (edits. H.Kato and H.Noro, including guidebooks of A21, A24, A25, B03, B04, B16, B19, B20, C01, C08, C22, and C25), 361pp.
- Vol. 6. Mineral Deposits of Japan and the Philippines (edits. T.Urabe and M.Aoki, including guidebooks of A04, A07, C04, C20, C33 and C36), 202pp.



写真1 B16(中央構造線)の巡検風景(リーダー：高木秀雄氏)。長谷村は立派な横断幕をふたつも用意してくれ、巡検参加者一同みな感激した。京都からバスで到着したところのスナップ。1992年8月29日写。

巡検の実施

サード・サーキュラーに提示した53コースの巡検を、すべて実施することができた(第2表)。巡検リーダー各位の熱意と努力と慎重な配慮によって、すべての巡検が、無事に、しかも成功裡に終わったことは、何よりも嬉しい。

巡検終了後、巡検参加者からは、巡検リーダーに感謝の手紙が多数寄せられた。A巡検・B巡検参加者の声は、会期中発行された新聞「京都」に載せられた。異口同音に感謝の声であった。

写真1はB16(中央構造線)の巡検風景(リーダー：高木秀雄氏)である。長谷村は立派な横断幕をふたつも用意してくれた。写真2はC13(伊豆大島火山)の巡検風景(リーダー：大島 治氏)である。お天気もよく、素晴らしい露頭のそばで、巡検参加者が楽しくカメラにおさまっている。

IGC 巡検(1992年)の参加者総数は1046人であった(第2表)。とくにB巡検参加者は540人の多数にのぼった(第2表)。B巡検は週末の日帰りもしくは1泊2日の巡検で、出費の負担も少ない。そのためか、近年人気が高い。ちなみに、1989年のWashingtonのIGCの巡検参加者の総数は、1276

人であった。そのうちB巡検参加者は670人であり、参加者総数の53%を占めた。今回のIGC巡検とよく似たパターンである。このパターンは今後しばらくは続くだろう。

巡検リーダー各位に対する財政的補助は決して十分であったとはいえないが、必要額は組織委員会から支払われた。これは、名古屋在住の古川為三郎翁の個人的寄付(500万円)に負うところが大きい。また、森 啓氏・小松正幸氏などは、関係地方自治体などに働きかけ、IGC巡検を財政的にサポートされた。

あとがき

京都国際会議場では会期中、巡検の特別コーナーが設けられた。B巡検・C巡検参加のコンファーマーシオン、巡検参加者への情報提供、巡検リーダー



写真2 C13(伊豆大島火山・箱根火山)の巡検風景(リーダー:大島 治氏)。伊豆大島の素晴らしい露頭「地層大切断面」のそばで、巡検参加者が楽しくカメラにおさまっている。お天気もよい。1992年9月5日写。

と巡検参加者との調整をはじめ、国内旅行の相談、換金の相談、そしてA・B巡検参加者の感想談の聞き役など、この特別コーナーは、まことに多忙であり、有効であった。

JTBの職員とともに、この特別コーナーに連日座って大役を果たされた、副委員長の水谷伸治郎氏、B巡検担当の井本伸広氏、幹事の足立 守氏・小沢智生氏・鈴木和博氏などの姿を忘れることはできない。

最後に、実施した53コースの、すべての巡検リーダー・サブリーダー・アシスタントの皆さんに、心からの御礼を申し述べて攔筆したい。

SUWA Kanenori (1993): IGC excursion.
